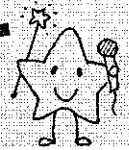


エリザベスさん インタビュー スター・ペアレンティン



当法人では親としてのあり方についてのプログラム「スター・ペアレンティング」を提供しています。2006年12月、そのプログラムを作られたアメリカ在住のエリザベス・クレアリーさんを招聘し、スター・ペアレンティングファシリテーター養成講座を実施しました。エリザベスさんがどのようにしてスター・ペアレンティングのプログラムを作られたのか、何の影響を受けてこうした理念を持つに至ったのかについてお話を伺いました。

●エリザベスさんはどのような環境で育ち、どのような人と出会ったのでしょうか？

母親が親教育者で、心理学も学び家庭で実践していました。母の世代は女性解放運動が起きる以前で、自らをフェミニストと称してはいませんでした。女性として自立し、仕事をもっていた人です。母は、私と2人の妹、そして弟を差別することなく、一人ひとりをおまかせに受け止めてくれました。私は小さいときから、スペルが書けなかったり、記憶がうまく引き出せなかったりという学習障害を持っていましたが、どうやってそれを克服できるかずっと考えてきました。自分の子どもに対するときもそうでしたが、いつも解決方法はあると私は信じています。ときには解決が難しいこともありますが、必ず解決できます。

大人になってから父が近くに住むようになりました。父も学習障害を持っていて、それを克服してきたことを後で知りました。父も私と同じ方法で克服してきたようです。私の娘にも学習障害がありましたが、私は自身が克服した方法を教えました。父は子どもや孫に接するとき、いろんな質問をしました。「なぜ草は伸びるんだろう？」というように。これは、答えを出すことを重要視するのではなく、そのことについて考えることを重要視しているのです。

ハイスクールに入って所属したガールスカウトでは、大人が「これをしなさい」と指示するのではなく、すべて自分たちで計画して実行するシステムでした。ですから、アイデアを出したり、計画を立てるといったような経験をすることができました。リーダーの女性2人は勇気ある強い人で、「だめなものだめ」と言い、くじけそうになったときでも、「最後までやりなさい」と厳しさも教えてくれました。私たちは、任せられると同時に責任も持たされました。隊のリーダーになり、子どもたちの世話をしていたので、子どもの世界ではどのようにしたら協調的になれるのか、気分を静かに保てることができるのか、また、暴力的でなく落ち着いた環境にするにはどうしたらいいかという

ようなことを実践しながら、手法を編み出す体験もしていました。



●親学習を始めたのは、どんなきっかけからですか？

自分が子どもを持ったとき、教会で親教育を学びましたが、私や友人たちの方がずっと良いと思えるような内容でした。その親教育者は、子どもがどのようなものなのかわからず、実践の部分が欠けていました。自分の子に通用したことは、他の子にも通用すると思っていたようで、子どもの多様性を知らずに、ひとつの方法で解決しようとする人でした。

1974年くらいから、友人と親学習を始めたところ好評でした。自分にとっての課題は、実践的であること。その後シアトルに移り、親学習のトレーニングを始めます。そのときには、PET(トマス・ゴードンの親業)のような、資格として認められるものではなかったので、公に講座をする代わりに冊子作りをしました。参加者みんなに冊子を渡し、チェックしてもらいながら中身を変えていきました。冊子が完成するまで2回教え、みんなに「返して」と言うと、「返せない」と言われ、役に立っていることがわかりました。それで1979年に、『親を楽しむ小さな魔法』を出版することになりました。また、自分が思うような本を出版するために、ペアレンティングプレス社を作りました。まだ名前を知られていなかったもので、恐い者知らずだったので、本の評価を決めるとき、お母さんたちが買える価格で販売するなら5,000部は売らなければならず、倉庫に在庫として残るだろうと思っていたら、9~10ヵ月で120万部売れました。この手の本で5,000部以上売れるなんてことはかつてなかったということです。PETは対象にする子どもの年齢が高く、就学前という低年齢の子どもを対象にしたものがなかったということもあります。本に書いた内容を実践するために親学習も始め、これまでに32冊の本を出版しています。

●「注目されていいんだということを知っておく必要がある」という部分は、現代社会に大きな示唆を与えることになると思います。このような「所属感」に気づいたきっかけは？

近年、子どもの発達における必要な要素として、「所属感」が指摘されています。親から自立する過程で、アメリカでは「地域への所属感」という考え方はありませ

ンテイニングが生まれるまで

ん。日本ではかつてはあったようですが、今は失われているようですね。今、アメリカにおいては、「所属感」が非常に重要だと言われています。それは、地域への「所属感」でなくても、「家族への所属感」などさまざまなものがあります。



●挫折感を味わったことや失敗から学んだことはありますか？

挫折感を味わったことはありません。間違っただけはたくさんありましたが、失敗したという感覚はないですね。うまくいかなかったときには、それと同じことをしないで、違う方法を試みます。そこで立ち止まらないのです。問題があったら、次はどうしたらいいのか考えます。講座で正しい答えが返ってこないときは、私の質問がよくなかったか、もしくは情報が不十分だったか、ならばどう質問を変えたらよいかを考えますね。

●「スター・ペアレンティング」という命名の由来について教えてください。

名前をつけると覚えやすいだろうと思っていました。でも、『甘やかさずに、たたくずに子育てする方法』の本を書いているときには、どんな名前にしたらいいのかわかりませんでした。最初の本を書き、教えているときに、「TAR」はすでに浮かんでいました。そして、何か覚えやすい言葉はないかと辞書を引いていたとき、「STAR」が浮かんできたのです。「STAR」という言葉は、成績がよければ★印をもらえるなど、英語ではとても肯定的な要素が含まれています。

●伝え方の工夫として特に留意していることはありますか？

親対象の講座とファシリテーター養成講座では異なります。親対象の講座では、講座の中で私自身の体験や受講生の体験、サポートした人の例などが出てきます。これは30年間継続して行っているからです。他の人から、私の例を使っていかがと聞かれますが、「それよりも自分自身の体験から話した方が説得力がある」と答えています。留意している点は、答えを与えるのではなく、答えを見つけるプロセスをサポートすること。一人ひとりが自らの問題を解決できるよう情報や選択肢を与えます。

●5つのポイント(15のスキル)のうち、1つの方法

だけ使うのはよくないと言われました。どのような弊害があるのでしょうか？

弊害があるともないとも言えると思います。弊害としては、人生は白と黒だけでなく、カラフルなんだということが伝えられないことです。いろいろな方法を持って持つほど、いろいろな人に使うことができます。たとえば、5つのスキル中のリミットだけをずっと使っていたら、子どもが思春期になれば通用しなくなります。他の方法を知っていなければ使えないのです。

●親が過去にしたことを虐待だったと子どもが言ったり、自分が子どもに虐待していたことを親が気づいたりしたとき、どんな対応が適切なのでしょう？

アメリカでは虐待を知れば通報の義務があり、そのための特別な協会があります。アメリカのクラスに来ている人は防止法を学んでいるので、虐待している人はあまりいません。

●子どもと親が互いに尊重し合うことがスター・ペアレンティングの素晴らしい点だと感じています。それなのに、つつい子どもが一人の人格ある人間であるということを忘れて、怒鳴ってしまいます。エリザベスさんにはそんな経験はありませんか？

親子が互いに尊敬できるようになるのが親学習のゴールです。怒鳴りたくなる親は多いですが、それは、親子関係だけが原因なのではなく、子どもの学習障害など、親が他のことでストレスを感じているからなのです。十分睡眠をとっていないとか、仕事をしすぎていたりとか、他の問題がある場合もあります。ひとつの解決方法としては、親がストレスから解放されること。親である前に一人の人間として、親学習をすることが大切ですね。

親学習のゴールは、親が親だけでスキルを実践するのではなく、ネットなどを使って子どもがどこへ行っても必要なサポートが得られるようにすることです。